第　１２３　号

平成３０年１０月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

☆ 仏 様 の 心 ☆

『仏様の心』

人は亡くなって、つまり死んでから仏になるとよく言われます。

ところが、真言宗では、「生きている今この時にでも、即・仏様になれる」（即身成仏）と教えています。

これはどういう事なのでしょう？

つまり、人は誰でも、もともと心の中にピカピカ光る「仏様の心」を持っているのだから、その仏様の心をいつでもしっかりと持ってさえいれば、それはそのまま生きながら仏様になれるという事なのです。

ただ、このピカピカ光る「仏様の心」は、「自分」という大きな山の中に埋もれてしまっているダイヤモンドのようなもので、どこにそのダイヤモンドが埋まっているのか、なかなか分かりにくいもののようです。

では、ピカピカ光る「仏様の心」とはどんな心なのでしょう。　例えばドシャ降りの雨の日、自分が傘を持って立っていたとします。その隣には傘を持っていない背広姿の男性が困った様子で立っていました。

場所は小さな駅なので、タクシーやバスも有りません。そこで自分の方は別に急いでないからと、隣の男性に自分の持っていた傘を使って下さいと差し出しました。その男性は深々と頭を下げて傘を受け取り、その傘を差して雨の中を歩いていきました。この時の傘を差し出した時の自分の心が即ち「仏様の心」と言える訳です。その証拠に傘を借りた男性は深々と頭を下げました。勿論、傘を貸した男性が会社の上司だったから仕方なく貸したとか、高級な背広を着ていてお金持ちのように見えたので何か御礼を期待して傘を貸した。などという事はなかったとします。

そんな下心があったりすれば、それは「仏様の心」ではありません。傘を差し出した時の自分の心は、全て傘を持っていない相手の男性の立場になって物事を考えていたのです。このように、自分中心ではなく、人の立場になってものを考える心こそ「仏様の心」と言えるのですが、いつもこのような心を持つ事は簡単な事ではありません。

しかし、何気ない日常生活の中でも、このように、ピカピカ光る仏様の心はチラリと現れたりもしてくれるものなのです。

どうか、皆様も自分が元々持っているピカピカに輝く仏様の心をどんどん掘り出していってくださいますように・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・南無大師遍照金剛

道場（どうじょう）

仏教が生んだ日本語

釈尊は、三十五才の折、菩提樹の下で覚りを得られた。釈尊の覚られた所は道場の原義である。　サトリの場から学道または修行をなす場所、法が説かれ実現される場所、仏道を修める場所、本尊を安置し修行する場所、信徒が集まり念仏を唱える場所を指すようになり、更には武術などの稽古の場所を指すことにもなった。
我々が人生の真の意味を追求する為の大切な場所という意味合いがある。

夢に向かって生きているとき、人は輝いている。

空海の言葉　シリーズ

澄（ちょうじょう）浄の水には、影（かげ）、万像（まんぞう）を落（うつ）す

「十住心論」

●●●澄みきって浄らかな水面には、すべての影が映る。

澄みきって鏡のような水面には、周りの景色も空の色も雲の形も、全ての姿がありのままに映る。

泥水が流れ込んで濁った湖の、ざわざわと騒がしく揺れ動いている水面には、木の葉一枚の姿すら映らない。

心が気ままに動いていると、世の中のことがなんにも見えず、判断に迷うばかりです。

眼耳鼻舌身の五感に入ってくる情報を少なくして、心をじっと澄ますと、世間の動きが見えてくる。と弘法さんは教えているような気がいたします。